様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年　６月　５日現在

機関番号：13901
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2009～2011
課題番号：21520080
研究課題名（和文）
コンディヤックとボネを通して見る感覚論哲学とその記号論
研究課題名（英文）
Sensationism and its theory of signs, viewed through Condillac and Bonnet
研究代表者
飯野　和夫（IINO　KAZUO）
名古屋大学・国際言語文化研究科・教授
研究者番号：30212715

研究成果の概要（和文）：本研究では、まず 18 世紀のフランス語文化圏に感覚論哲学が生まれた背景を探り、感覚論哲学と親和的な性格を持った匿名の著作である『世界形成論』についての研究をまとめた。感覚論哲学それ自体の研究としては、コンディヤックが人間の精神活動の極めて動的な理解に到達していたことを示した。また、コンディヤックについて、人間知性の発展の道筋がどう考えられたかを検討し、そこで記号が果たす役割についての考察を跡づけた。さらにコンディヤックとボネの比較研究にも着手した。

研究成果の概要（英文）：Firstly, I explored the background against which sensationism was born in French thought in the 18th century and studied an anonymous text which has affinities with sensationism, "Dissertation sur la formation du monde". Researching sensationism itself, I showed that Condillac had reached a very dynamic conception of man's mental activity. I also analyzed Condillac's statement about the process of development of human understanding. I pursued Condillac's consideration of the role of signs in this development. Furthermore, I began to compare Condillac's thought with Bonnet's.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	500,000	150,000	650,000
2010 年度	600,000	180,000	780,000
2011 年度	800,000	240,000	1,040,000
総　計	1,900,000	570,000	2,470,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：哲学、思想史
キーワード：西洋思想史

１．研究開始当初の背景

本研究の学術的な背景、すなわち国内・国外の研究動向と、その中での本研究の位置づけは以下のようである。

感覚論哲学は、十八世紀から十九世紀初頭にかけてフランスさらには西欧の思想界を代表する思潮であった。それは現代の視点から見ても重要な問題をはらんでいるが、19 世紀以降ややもすればドイツ系の合理論哲学の陰に隠れる存在となり、現代に至った。しかし、コンディヤック(1715-1780)については、第二次世界大戦直後にルロワの先駆的な研究が現れ、1970 年前後にはジャック・デリダがやはりコンディヤックに注目した。おそらくそうした影響もあって、今日、国外ではフランスを中心として、コンディヤックについては専門的な学術研究が充実しつつある。一方、日本では、感覚論関係の研究は

いまだ揺籃期にある。コンディヤックの『感覚論』は第二次大戦直後に翻訳出版されたものの、その後は今日に至るまで、中山毅、古茂田宏、山口裕之、吉澤保といった方々、そして報告者がコンディヤック研究を行い、他方、報告者がシャルル・ボネ(1720-1793)を研究するなど、感覚論哲学者個々の研究が行われてきたにとどまる。コンディヤック、ボネらの思想を比較しつつ感覚論哲学を総合的に理解しようとする研究はいまだ存在しない。この点は国外でも似た状況であり、コンディヤックについては研究が進みつつあるものの、ボネらも含めた総合的研究はやはり存在しない。本研究はこの空隙を埋めようとするものである。

一般に、西欧の十八世紀思想は現代の多くの思想家に刺激や霊感を与え、彼らの考察の対象となっている。例えばフーコー、ドゥルーズ、セールらであり、特にジャック・デリダは、ルソーとコンディヤックという二人の十八世紀フランスの思想家を本格的に論じている。とはいえ、デリダと十八世紀思想の関係を扱った研究としては、国内・国外とも、ルソーとの関係についての若干の研究があるにとどまり、コンディヤックとの関係についての研究はほとんど存在しない。本研究では、デリダによるコンディヤック解釈も検討する。これはデリダ哲学の斬新な視点を取り入れて感覚論哲学を捉え直すことであるとともに、デリダ研究にも新たな寄与をなすものとなろう。

次に、報告者個人がこれまでに行ってきた研究と本研究の関係は以下のようである。報告者は、ボネについてはほぼ 1994 年までに、コンディヤックとの比較研究を行うために必要な準備段階の研究を終えている。1995 年以降は、コンディヤックの研究に取り組んできた。その間、2006 年にはデリダのコンディヤック論である『たわいなさの考古学』を人文書院から翻訳出版し、報告者自身によるコンディヤック研究にもデリダの観点を取り込んできた。報告者によるそうしたコンディヤック-デリダ研究の本研究開始時点での到達点は以下のようである。

報告者は「デリダのコンディヤック読解－自同性の問題を中心に－」(2009 年 3 月) において、デリダとコンディヤックの思想上の接点を、自同性の問題に焦点を当てて検討した。デリダのコンディヤック論においては、自同性や自同的命題の概念は論旨展開の中心にかかわっている。だが、コンディヤック本人はこうした概念を一カ所でまとめて論じているわけではなく、デリダの著作からもコンディヤックの議論そのものはわかりにくい。そこで、報告者は、コンディヤック自身の自同性をめぐる議論をできるだけ正確に再構成して提示しようと試みた。

コンディヤックは、諸真理は、それが具体的にどこまで発見されているかは別として、総体としては「一つの同じもの」(自同的) であり、新しい真理の発見は、この自同的な真理の体系を細部において展開することである、と考えた。彼は、この確信を支えとしつつ、真理の形式的条件、自然界の事象にかかわる真理の特質、その探究方法を考察した。具体的には、彼は、人間精神の発達をめぐる諸真理を発見することを試みた。彼が行った、人間精神の発達の探究の特徴は、言語記号の働きを重視することであった。

同じ論文で報告者はまた、自同性とそれにかかわる記号の問題を中心として斬新なコンディヤック解釈を展開したデリダの議論を検討した。コンディヤックは、人間が記号を使用することは精神の能力を飛躍させて新たな認識の地平へと導くと同時に、たわいなさに陥る可能性をも秘めたものであると、鋭い観察と分析に基づいて時代に先んじて指摘した。コンディヤックの分散した記述を結びつけ、相互に連関したものとして浮かび上がらせたのは、デリダの鋭く独創的な読解であった。

デリダの議論は時として、コンディヤックが考えていることを超えてデリダ自身の哲学の表明となっている印象を与える。しかし、記号の働きについてのデリダ自身の洞察が、コンディヤックの観察や分析と共鳴し、それらを補い、それらが有していた潜在的な価値を最大限に提示したと言うべきであろう。

このように報告者はボネとコンディヤックについての研究成果を蓄積してきた。とりわけコンディヤックについては、現代思想の観点も取り入れて研究を進めてきた。

２．研究の目的

ここまでに見たような、学会の動向、そして個人的な研究の蓄積を背景として、本研究の具体的目的は、

〈1〉 コンディヤックとボネという二人の代表的感覚論者の思想を比較検討し、それを通して、とかくコンディヤック一人に帰されてしまいがちな感覚論哲学を総合的に研究する第一歩とすること、また、

〈2〉 感覚論哲学を現代思想の観点から捉え返し、その現代的意義を探ることである。

３．研究の方法

本研究においては、上に具体的な目的として掲げた２点について、それぞれ以下のことを実行する予定を立てた。

〈1〉 感覚論哲学研究

コンディヤックとボネそれぞれが感覚論に基づいて展開した人間精神の考察を、相互に比較しつつ研究する。具体的には、コンデ

ィヤックの『人間知識起源論』(1746)、『感覚論』(1754) とボネの『心理学論考』(1754)、『精神能力分析論』(1760) を扱う。二人の哲学は、内容において関連していると同時に相互に影響を与え合ってもいるので、ボネが残した『自伝』などを資料として、相互の影響関係についても考察する。

また、可能であれば、コンディヤックらの感覚論哲学が十八世紀の末葉にデステュット・ド・トラシ(1754-1836)ら次世代の哲学者たちへと継承される過程の分析にも手をつける。

〈2〉現代思想の観点からの感覚論哲学の捉え直し

現代の最も著名な哲学者の一人であるデリダのコンディヤック論を検討する。ほぼ1970年代半ばまでの、いわゆる初期のデリダは、コンディヤックの感覚論哲学やルソーの感覚論的な主張の内に含まれる記号論的な思考を評価し、自らの哲学の諸概念を用いて分析を加えた。その議論は本格的であり、デリダが独創的な哲学者であるとともに、思想史の研究者としても類まれな力量を備えていることがよくわかる。デリダのこの分析を手掛かりに、十八世紀感覚論哲学とデリダ哲学とを関係づけ、双方に対して申請者なりの新たな分析の視点を確立する。

４．研究成果

上に具体的な目的として掲げた２点についての研究成果は以下の通りである。

〈1〉感覚論哲学研究

報告者はまず、感覚論哲学研究の一環として、コンディヤックらの厳密な感覚論哲学が生まれる背景を探った。具体的には、十八世紀中葉とそれ以降のフランスを中心とする思想界の状況に注目し、感覚論哲学と親和的な性格を持った著作のありようを探った。そうした探求の中から、一例として、匿名で手写本の形で発表された『世界形成論』(成立年不詳、1738年と記載あり) を取り上げ、研究をまとめた。報告者はこの著作を日本語に翻訳した上で、著作の解題を付し、『啓蒙の地下文書 II』の一部として2011年6月に法政大学出版局から刊行した。

十八世紀中葉のいわゆる啓蒙思想は、その実きわめて重層的な思想運動であった。当時の言論統制を避けて手写本として流通した、ラディカルな「地下文書」群もそうした運動の一翼を担っていた。コンディヤックは人間の魂の本質については明言せず、ボネは人間の魂をはっきり精神実体と認めており、彼らは唯物論には与していない。しかし、唯物論の側からも、感覚論的思考へと接近しえたことをこの著作は示している。

この著作は、人間の感覚の分析そのものには踏み込まないものの、以下のように、世界（宇宙）の形成から説き起こして、唯物論的、感覚論的人間像へと至っている。

太初の宇宙において、湿りけと協調した火によって、「形相」が生命を帯びたものとして、最初は太陽に近い惑星に、次いで地球にも現れる (p.[124-125])。単純な分子が重力によって (p.[127])、あるいは水の作用や「浄化、腐敗、加熱ないし発酵によって」(p.[136-137]) 互いに結びつき、初期の形相を形成した。初期の形相は感覚を持たない分子の集合にすぎなかった (p.[138])。やがて分子の調和した配列が感覚を生み出した(p.[140])。感覚は普遍的実体の存在様式の一つにすぎず、繊維、膜、脈菅のあいだのある種の連携の結果なのである (p.[178])。これは、Ｔ・Ｓ・ホールが言うところの「生命を、組織構造化の結果として生じてくる作用」と見る考え方、あるいは「組織構造がますます複雑になると、そのことが（・・・）新しい生命の様態、新しい機能あるいは行動の出現を許す」とする考え方、つまりは「創発 emergence」としての生命という考え方と合致する。この延長上に、人間においてはさらに、「感覚に依存」(p.[174]) する観念や思考が発展すると考えられたことはもはや明らかであろう (Cf. p.[212], p.[233-240])。こうした「創発論」的な唯物論は、十八世紀フランスの唯物論者たちの一部（ディドロら）にあった、感覚・感性を物質の一般的な特質と考える「物活論」的唯物論よりも、むしろ発展の可能性を秘めた考え方だった。

コンディヤックとボネの感覚論哲学の研究それ自体としては、報告者はまず、論文「コンディヤックの動的人間観--欲求の理論とその展開--」を発表した（名古屋大学大学院国際言語文化研究科『言語文化論集』第XXXIII巻第2号、2012年3月)。この論文においては、コンディヤックが『感覚論』、『動物論』(1755) などの著作において、人間の精神活動の極めて動的な理解に到達していたことを、デリダも参考にしつつ示した。

具体的には、本論文ではまず、人間のもつ欲求や欲望、あるいはいわゆる感覚的・感情的な働きについてのコンディヤックの議論を『感覚論』を中心に跡づけた。その結果見えてきたことは、『感覚論』の一見静止的、幾何学的な印象とはうらはらに、コンディヤックが人間の実相に迫ろうと苦心し、また実際に人間精神の動的な姿を照らし出すに至ったことである。

コンディヤックは彼の体系的哲学著作の第二作である『感覚論』において、人間と同様の潜在能力を備えた「立像」を想定し、それが嗅覚、聴覚、味覚、視覚、触覚を順次獲

得していくと想定する思考実験を行い、それを通して観念の形成を含む魂の諸機能の発展過程を探求した。体系的哲学著作の第一作である『人間知識起源論』は、人間において記号も介して「知性」が発展する過程を扱っていた。それに対して『感覚論』は、知性が発展する以前の、欲求、欲望、感情、意志、実践的知性などの働きを扱っている。

コンディヤックはこの『感覚論』において、人間の欲望には「念入りな選択」という上位の精神作用がかかわる可能性を指摘した。また、＜精神的な快・不快＞にかかわる欲求・欲望も問題にした。これを受けて、続く『動物論』では、次のような内容が展開される。人間が知ることになった精神的な快・不快の感情は、社会の中で絶えず繰り返される。それに対応して人間は新しい種類の欲望、知的な欲望を絶えず生じさせる。そして、人間はついにはこの種の知的な欲望を「必要なもの」とし、「欲望することへの欲求」を抱くに至ると考えられている。この「欲望することへの欲求」は人間においてのみ獲得される地平に属している。この知的な欲望は増殖することをやめない。ついにはコンディヤックは、欲望すること自体を楽しむ人間という、極めて動的な人間観に到達するのである。

人間の生の実相に接近する『感覚論』第四部に、またそこへと向かう『感覚論』全編の推論に、さらには『動物論』における人間の考察に、私たちは、ロマン主義的哲学以前の、いわゆる「古典主義時代」の人間観察の到達点を見ることができる。十八世紀中葉のこの時期に、文学的方法によらず哲学的方法を用いて人間精神のダイナミックなあり方を描き出しえたことは特筆に値しよう。

さて、この論文では直接の対象とはしなかったが、コンディヤックは、人間精神の知性的側面の探究、たとえば記号の作用の分析や記号の逸脱の指摘などにおいても時代に先んじた鋭い分析を示している。このような欲求・感情の面と知性の面の双方にわたるコンディヤック思想の先進性にいち早く光を当てたのはデリダの炯眼であった。報告者は本科研費研究に入る前に、人間の知性的側面についてのコンディヤックの思想と、それについてのデリダの解釈を照合しつつ検討した（論文「デリダのコンディヤック読解」）。人間の欲求・感情の面についてのコンディヤックの思想に焦点を当てた本論文においても、報告者は注においてデリダの解釈との関連を示した。コンディヤックの思想とあらためて対照することで、欲求論、感情論の場面でもデリダの解釈の的確さと、その先の独創性が確認できるのである。

また、発表は 2012 年度になるが、報告者は本研究の一環として、論文「コンディヤックの知性理論の展開」の執筆を進めた。この論文においては、まず、コンディヤックの『人間知識起源論』（以下『起源論』）における、人間知性の発展や記号の役割などにかかわる論述を分析した。さらに、コンディヤックが『起源論』のテキストを一度書き上げた後に、その内容を「組み換え」ようとした経緯を、現代思想における「事後性(事後修正)」の概念も参照して論じた。

コンディヤックは、『起源論』第 I 篇第 II 部で「人間の魂の働きの生成過程」を跡づけている。すなわち、人は、(1) 観念相互の連関を人為的記号の助けを借りて拡充させ、(2) 理性と呼ばれるものを獲得するに至る、とされる。なお、理性はしばしば考えられてきたような何らかの生得的能力ではなく、「私たちの魂のさまざまな働きを調整する仕方についての知識」であるとされる。この部分では、観念連関の原理とそれにかかわる記号の重要性が注目される。つまり、記号の使用から生まれる新たな観念連関が、人間の知性が発展する原理として確認される。人は、たやすく扱うことのできる記号を媒介として、魂の高次の働きを「自在に」操作できるとされる。

「魂のいろいろな働き」は次のような順序で生成するとされていることになる。(1) 知覚、意識、注意、覚え－＞(2) 想像、記憶－＞(3) 記号の使用、制御できる想像、制御できる記憶－＞(4) 反省－＞(5) 観念の区別、抽象、比較、組み立て、分解、分析、判断、推論、知性－＞(6) 理性、機知。

コンディヤックは『起源論』の出版後、この著作に本格的に手を加えることはなかった。ただし、上に見た第 I 篇第 II 部の最終章である第 XI 章の末尾部分にあたる§107 と§108（これらのパラグラフ番号は第 II 部第 I 章からの通し番号）に、初版発行後すぐ、「事後的」に改訂を施したことが知られている。

改訂の内容だが、初版では§107 に加えて§108 が存在するのに対して、改訂版では§107 の後半が書き変えられて拡大され、初版にあった§108 は削除される。初版の§108 では、人間の魂の低次の能力と高次の能力が、知識の素材と活用の役割を持つものとして対比されていた。しかし、この対比の叙述は、『起源論』の執筆をひとまず終えたコンディヤックの意思により、より重要な補足に場所をゆずることになる。

改訂後の§107 の冒頭部分は初版と共通だが、この部分でコンディヤックは、上に見た『起源論』第 I 篇第 II 部の全体の内容、つまり第 I 章で「知覚」が論じられることに始まって、最終の第 XI 章で「理性、機知」の生成が論じられるまでの内容の大枠を提示している。この箇所では、第 I 篇第 II 部の

内容が踏み込んで要約されるわけではないが、観念連関の原理とそれにかかわる記号の重要性があらためて示唆される。

改訂版はこの後、広く魂の高次の諸機能に言及する。初版との共通部分に続けて、直ちに（2）理性と反省という魂の高次の働きが語られる。次いで、(1) 観念連関という原理と（2）魂の高次の働きとから、別のさまざまな高次の働きが派生するとされる。魂の高次の働きはそれまでにも言及されてきた。しかし、それまでは低次の働きから高次の働きが生成する場面に焦点が当てられていた。一方、ここでは、理性と反省という高次の働きが一度生成した後に、ほかの高次の働きが派生する新たな道筋が提示されている。

この新たな道筋は、具体的には次のようにまとめることができる。(1) 記号、観念連関－＞(2) 理性、反省（以上、初版との共通部分）－＞（以下、改訂部分）(3a) 制御できる注意、(3b) 新たなさまざまな観念連関、記憶－＞(4) 分析、制御できる想像、制御できる記憶－＞(5) 概念化、知性〔区別、比較、組み立て、分解、判断、推論〕。

この改訂部分の内容は、この第 I 篇第 II 部の記述にすでに織り込まれていた魂の高次の働きを取り出し、その高次の機能の面から魂の働きを捉え返していると考えることができよう。

この論文をまとめることを通して報告者は、本研究の課題の主要な部分をなしている感覚論哲学における記号への考察を跡づけるという課題を、コンディヤックについて果たすことができたと考える。

さらに、報告者は本研究の一環として、コンディヤックとボネの感覚論思想のそれぞれの特徴と相互関係についての研究を開始した。「１．研究開始当初の背景」でふれたように、報告者は、このような比較研究を行うために必要な準備研究をボネについてはすでに終えている。なお、この比較研究を補強するために二人の実生活上の関係を、ボネが残した『自伝』などを資料として検討する作業も併せて開始した。この成果をまず論文「ボネの『自伝』に見るコンディヤックとの関係について」としてまとめる予定でいる。

なお、〈1〉感覚論哲学研究を進めるため、とりわけ論文「コンディヤックの知性理論の展開」を執筆する上での資料収集のために、報告者は 2011 年度にフランス国内とロンドン、ジュネーヴへの調査旅行を行った。

この調査旅行の目的は、具体的には、上にふれた『人間知識起源論』の内容の組み換えに関連して、この著作の、著者の生前から 19 世紀にかけて出版されたバージョンによる内容の異同を各地の図書館の蔵書で確認することであった。実際にこの調査を行ったのは、パリのフランス国立図書館とアルスナル図書館、ロンドンのブリティッシュ・ライブラリー、リールのリール第 3 大学付属図書館、ジュネーヴのジュネーヴ大学付属図書館、リヨンのリヨン公立図書館である。この調査において、コンディヤックの著作集の一部をなすものも含めて、『起源論』のさまざまなバージョンの図書 13 種類（24 冊）を手にすることができた。

その結果、この著作の初版（1746 年刊）にすでに改訂前と改訂後の二つのバージョンがあること、改訂前のバージョンもその後刊行され続けたことを確認することができた。なお、実際に手にした図書の内、改訂後のバージョンが 9 種類（18 冊）、改訂前のバージョンが 4 種類（6 冊）という内訳であった。

また、ジュネーヴ公立図書館でボネの手稿類を調査することも旅行の目的の一つとしていたが、これも予定通り行った。ボネについての調査の結果は、「ボネの『自伝』に見るコンディヤックとの関係について」という論文として執筆を始めた。さらにジュネーヴでは、当地の自然学博物学学会事務局を直接訪問し、日本からは手を尽くしても入手・閲覧が困難であった学会誌のボネ特集号: *Charles Bonnet: savant et philosophe (1720 - 1793)*, Mémoires de la Société de physique et d'histoire naturelle de Genève, vol.47, Genève, 1994, 321 p. を入手した。

〈2〉現代思想の観点からの感覚論哲学の捉え直し

「２．研究の目的」欄に掲げた具体的な目的の２点目である「〈2〉現代思想の観点からの感覚論哲学の捉え直し」は、ここまでに見た第一の目的としての「〈1〉感覚論哲学研究」の中で随時行った。

コンディヤックと現代思想との関係を問題にするとき第一に問題となる、現代フランスの哲学者デリダは、コンディヤックの哲学を論じる際に、現代思想における記号、目的論、「事後性」などについての思考に立脚している。このようにコンディヤック思想を分析するに当たって現代思想の諸概念を有効に用いることができることは、コンディヤック思想そのものの斬新さ、現代性を示していると思われる。

報告者は本研究の中で可能な限りの努力をしてきたが、「研究の目的」の達成度については当初の見込み通りには進まなかった。

論文「コンディヤックの知性理論の展開」は上で内容を示したが、すでに大部分が完成しているものの、平成 23 年度内の発表には至らなかった。

コンディヤックとボネの関係についての

研究もいまだ不十分な状態にとどまっている。現在は、二人の実際の関係を扱う論文「ボネの『自伝』に見るコンディヤックとの関係について」の執筆を始めたところであり、二人の思想面の比較研究もその端緒についた段階である。また、感覚論哲学が次世代へと継承される過程の分析にはまだ手をつけることができていない。

本研究の進展が当初の予定より遅れた理由は、コンディヤックの思考の変遷が予想以上に複雑であったこと、考察が進むにつれて新たな考察が必要となったこと、などにある。しかし、研究の推進が不可能であると感じたことはないので、今後も、本研究を発展させる形で、粘り強く感覚論哲学研究を継続していく予定である。

本研究を今後さらに追求していくための方策は次のように考えている。

現在大部分が完成している「コンディヤックの知性理論の展開」は、加筆の上、今年度中に発表する。他方、平成 24 年度より平成 26 年度まで、「コンディヤックとボネに見る感覚から知性への発展－感覚論哲学比較研究－」という課題名で、新たに科学研究費補助金（基盤研究(C)）を受けることになった。この研究は、平成 23 年度までの本研究を継続、発展させるものである。ここにおいては、これまで行ってきたコンディヤック研究の総合を図りつつ、ボネとの比較研究も本格的に進める予定である。その際、感覚論の要点である、感覚から知性への発展という考え方を中心に据えるつもりでいる。研究に当たっては、これまで同様、現代思想の知見も取り入れ、感覚論全体の現代に通じる意義をも究明したいと考えている。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 1 件）

① 飯野和夫、コンディヤックの動的人間観―欲求の理論とその展開―、名古屋大学大学院国際言語文化研究科『言語文化論集』第 33 巻第 2 号、査読無、pp. 3-26、2012 年 3 月

〔図書〕（計 1 件）

① 飯野和夫翻訳、世界形成論、『啓蒙の地下文書 II』、法政大学出版局、査読無、pp.955-1019、2011 年 6 月
この図書は次の研究論文を含む:
飯野和夫、世界形成論解題、査読無、pp.1139-1155

６．研究組織

(1)研究代表者
飯野　和夫（IINO　KAZUO）
名古屋大学・大学院国際言語文化研究科・教授
研究者番号：30212715

(2)研究分担者なし

(3)連携研究者なし